



■ CO-DIALOGUE

恵谷浩子
(文化的実践学研究者)

×

兩宮庸介

(アーティスト)

Review by Spectator

— 野口卓海 (美術批評家/詩人)

■ オープン北加賀屋

- 旧千鳥文化住宅再生絵日記
家成 俊勝 (dot architects)
- 街なか 薙士師への道～中級編～
金田 真孝 (NPO 法人 コトハナ)
- 北加賀屋のエジソンたち
アノワギ はかせ (東京理科大学 勉強型ポッド
キャスト 専業あるでひど)
- 隠れ眼鏡店の、出張お悩み相談室！
内原 弘文 (隠れ屋 1632 秘密基地)

■ TOPICS from CFCC

■ RELAY COLUMN

豊月寛大 (スマートニュース株式会社)
山田淳也 (NPO 法人 BEPPU PROJECT
代表理事 / アーティスト)

no. 013

Dec. 16, 2016

paper

<http://www.chishimatochi.info/found/>



“paper C” by Chishima Foundation for Creative Osaka



おおさか創造千島財団



CO-DIALOGUE

恵谷 浩子

(文化的景観学研究者)

2007年より奈良文化財研究所の研究者として文化的景観の研究に携わる。造園学を専門としつつ、文化的景観の基礎的かつ体系的な研究に従事する。また、四万十川流域や宇治、京都岡崎をはじめとする全国各地の文化的景観の調査研究に携わり、価値や保全の方策を探求している。

×

雨宮 庸介

(アーティスト)

1975年生まれ。1999年より作品発表をはじめ、彫刻、ドローイング、ビデオインスタレーション、パフォーマンスなどを媒体に国内外で作品を制作・発表。2014年「国東半島芸術祭」に参加し「1300年持ち歩かれた、なんでもない石」プロジェクトを開始。2016年、梅田哲也らとの作品《7つの船》発表。

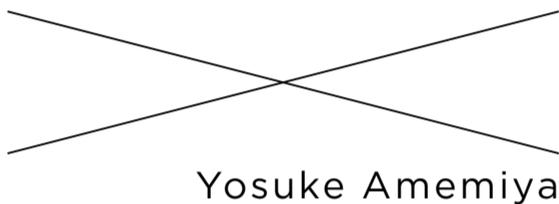
収録日: 2016年11月23日(水)

場所: 奈良文化財研究所 [奈良県奈良市]



photo: Natsumi Kinugasa

Hiroko Edani



Yosuke Amemiya

戦後の高度経済成長期における地域開発が、古くから続く日本の風景に大きな変化をもたらしました。その動きに対して保存運動が起き、景観をつくり育てるための試みと生活景の再評価がなされた20世紀末。そして2000年代、さまざまな地域で開催される芸術祭や地域創生事業を機に、改めて地域を読み込む「方法」と専門分野を超えた「言葉」が求められています。今回のCO-DIALOGUEでは、「地域を見出し、伝える技術」をテーマに、文化的景観学研究を行う恵谷浩子氏、ベルリンを拠点に活動するアーティスト・雨宮庸介氏にお話をいただきました。

参考文献:
○『文化的景観スタディーズ 01 地域のみかた-文化的景観学のすすめ-』(独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所/2016年) ○『美術手帖2014年9月号増刊 国東半島芸術祭公式ガイドブック』(美術出版社/2014年) ○『四万十川流域 文化的景観研究』(独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所/2011年)

文化的景観学がとらえる 地域の可能性と揺らぎ

雨宮: 僕は、歴史的背景や資料に重点を置くリサーチを主眼とした作品をあまりつくらないのですが、古墳を見学したり、盗掘の跡を分析したりすることが趣味で、いろんな場所を訪れています。恵谷さんの「文化的景観学」も興味深いのですが、どのような研究なんですか?

恵谷: 実は「**文化的景観学**」というのは、この10年の間に体系立てられてきた若い学問なんです。研究の対象は、**景観の基盤となる自然と、その自然に寄り添う人の営み**。例えば「棚田」の風景を思い出してみてください。傾斜地という地形を生かして稲作を行っています。ただ、自然だけではつくりえない風景です。脈々と続く、人の営みが景観に表れているというわかりやすい事例です。

□文化的景観
2004年の文化財保護法の改正により、文化財の種類に「文化的景観」が加わった。「文化的景観」とは、人間の営みに根ざして形成される、人間の共同体と環境が一体化した領域のまとまりをさす。重要文化的景観に選定された地域は50件を超えるが、まだまだ若い概念であり、それを支える考え方の基盤(「学」)が求められている。

<http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/keikan/>

雨宮: なるほど。都市部も対象になるのでしょうか?

恵谷: そうですね。例えば、大阪・鶴橋の駅前商店街も同じく、人の営みとその土地ならではの風景をつくっている事例だと思います。韓国の方が何世代にもわたって大阪で暮らし、文化を育んできたバックグラウンドがまちに表れている。ここでポイントなのは、いずれも今、その瞬間も人の手が入り、変化の真っ只中にある不定形のものなんです。人の営みは、時代によって変化していくものだという前提があります。

□文化的景観学
地理学や生態学、建築学、景観工学、造園学など、さまざまな分野を横断して文化的景観の論じる視点を体系化し、「文化的景観学」として理解することを目的として、奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室が「文化的景観学検討会」を立ち上げた。これまでの研究・実践の内容を専門分野外の人も幅広く伝えるメディア「文化的景観スタディーズ」シリーズを2015年度より刊行。

<https://www.nabunken.go.jp/>

雨宮: 「景観」と聞くと、なんとなく見た目の話かと思いがちですが、人がその地域でつくり上げてきた文化もその対象に入るのですか?

恵谷: 私も奈良文化財研究所へ入所した当時は、目に見える景観だけを考えていましたね。そこから見た目だけではなく「地域」をとらえる見方に気づき、風景の意味を語り伝えるための言葉を探し続けています。

雨宮: これまでの景観論とどう異なるのでしょうか?

恵谷: 大きな特徴は、常に「時間」を内包していることですね。あとは

目に見えている世界だけではなく、いろんな関係性の中で地域が成り立っているということを大事に考えています。文化財の観点から言うと「守る=その状態のまま凍結させる」ことになるのですが、地域は、時代時代に変化していくので、地域と文化財の考え方は折り合わない。その打開策として新しい景観論が必要だと考え、はじめたのが文化的景観学。

雨宮: 具体的に、新しい概念をつくらなといけなくなった行き止まりが、現場と制度上のレベルでも見えていたのですか?

恵谷: そうですね。文化財について取り組んでいると「何を守ればいいのか」とよく聞かれます。例えば、京都では町家やお寺だけを保護すれば、その風景の良さが維持されるかと言われれば、違いますよね。それを私たちは、人らしさ、場所らしさと同じく「**地域らしさ**」と呼んでいます。でも、明快な答えになっていないようで、「わかりにくい」と言われることも少なくありません(笑)。

□地域らしさ
「然るべきものが、然るべきあり方で、然るべきところにある状態 (the right thing in the right place)」とも言い換えられる。人々が暮らし続けてきた地域には、風土との付き合いの中で生まれた営みの作法があり、時にはそれが日々の暮らしのあり方として続けられ、またある時にはどこに住むかという場所の選択や、建物のかたちとなって表れる。

雨宮: 少なくとも、もともと揺らぎがある「文化」みたいなものに対して、ある程度同じ量の揺らぎを未来に向けて見積もっておかないと、硬直してしまいますね。ただ、これまで続けてきたような、普遍的でわかりやすい、地域に根づく伝統、環境に合わせた暮らしの知恵などもすでにあります。

恵谷: そうなんです。地域は、「揺らぐ」んですね。大切なのは、揺らぎの幅を決めておくことだと思います。近代の、特に戦後の技術は、その揺らぎから大幅に離れてしまいがちで。人が住むことができなかった場所を造成し、家を建て、不幸な災害にあってしまうということもひとつの例として考えられるでしょう。新しいことを取り込むにも、揺らぎから離れずあり続けることが重要です。

雨宮: 例えば、僕らから見たら200年前と220年前では比較的緩やかな揺らぎとの付き合いで良かったように思えるけれど、産業革命以降、根底にあったものを覆すような倍増する技術を手に入れたことで、急激に付き合いにくいギャップが増えています。それとどう向き合うかがすごく大事ですね。極端に言えば、新しいものばかりに偏っていたら、どうやってその流れを止めるか。それとも近代のジャンプ力に合わせてある程度破壊的なプログラムを内包させるのが正解なのか。

恵谷: 新しいものをどう考えるかって実はすごく難しく、文化財は基本的に現状維持なんです。ただそれだけでは衰退していく道しか残っ



「流域という単位で地域の変化を調査してみると、変化は四万十川流域内で連鎖的に起こっていること、一方で、変化しながらも変わらないものがあることに気づきました。それは、川の中に入って行う営みです。縄文時代から続く川漁、戦後まで続いた筏流しや渡し舟、現代のカヌーやSUP。その背景には、四万十川流域の堅く崩れにくい地質や豪雨によって保たれる清流といった自然基盤があることがわかりました。(恵谷)」

ていない。例えば京都は、循環・変化して新しい要素を取り込みながら、常に第一線の都市であり続けるというのが大切なことで、町家や寺社仏閣をそのまま維持していただくだけでは、だめなんですよ。

雨宮: 歌舞伎などの伝統芸能も一緒ですよ。そもそも新しい態度が大事だったはずで、今も実際に見ると新しくあり「続ける」ことが形式の中に残っている。そういう芸術や芸能などの表現に比べて、地域は文化的な価値のエッジを定めにくい分、方向性を決めるのが難しい。

恵谷: 地域には、たくさんの新しい選択肢があって、どれを選ぶかはやはりその時代に生きている人たちに委ねられているように思います。その時に「地域らしさ」や揺らぎの幅を気にすることができるかどうかで大きく違ってくるんじゃないでしょうか。

あらゆる場所・時間の重力を感じ取ること

恵谷: 文化的景観学を研究しはじめたことで、新しく何か取り組んだり、地縁のない場所へ移り住んだりすることが、ゼロからのスタートではないのだとわかってきました。自分が親や周囲の人の影響を受けて成り立っているように、地域もさまざまな要因によって成り立っている。先日、徳島県神山町で活動されているプランニング・ディレクターの西村佳哲さんと、それはまるで「重力みたいなもの」という話をしすぎて腑に落ちました。地域に飛び込んでいく若者が、その土地で何をしたらいいか考えるとき、ずっと行われてきたこと、大切に引き継がれてきたことの背景まで調べると、その土地の「重力」が見えるはずなんです。

雨宮: 具体的には、どういったことがありますか?

恵谷: 例えば、四万十川流域ではソーラーパネルを川辺につくる計画が動いています。あの地域は台風の通り道でそんなことをしたら盛土ごと流されてしまう可能性が高い。でも関東の企業が企画しているから、重力

=川の形と雨の量についての感覚が身体化できていないんです。

雨宮：そこでいうと重力とは基本的に、自然からの要件が多い？

恵谷：そうですね。重力にもいろんなレベルがあって、自然からくるものが強い重力。別のものだと、親とか親戚といった血筋も重力のひとつだと思います。親戚付き合いはネガティブにとらえると面倒くさい人間関係なんですけど、それもそもそも重力みたいなもの。自然と同じように付き合っていくものと思えば、無理なく付き合える気がします。

雨宮：僕はその重力を楽しみたいので、嫁の親父とサン飲みしたりしていますよ(笑)。

恵谷：雨宮さんも大分県の国東半島で行われた芸術祭に参加されて、地域のいろんなものを見てこられたんじゃないかと思えます。

雨宮：そうですね。「**国東半島芸術祭**」に参加して、「**1300年持ち歩かれた、なんでもない石**」プロジェクト(以下、1300石プロジェクト)を立ち上げ

□国東半島芸術祭

2012年から国東半島で開催されていた「国東半島アートプロジェクト」の集大成として、2014年に大分県国東半島各所で開催された芸術祭。総合ディレクターは山出淳也。同半島の海岸線や山間部、集落などに作品を設置する「サイトスペシフィックプロジェクト」をはじめ、「パフォーマンスプロジェクト」、「レジデンスプロジェクト」を中心に展開した。

<http://kunisaki.asia/>

ました。このプロジェクトは、そこらへんにある小さな石6個を6人が1つずつ持って、5年1代として260代かけて1300年間持ち運びます。国東半島を起点に3314年まで続くプロジェクトです。

恵谷：すごく長い時間を見通したプロジェクトなんですね。2010年に奈良で

面」や「空」しかないような、基礎的なものだけを材料にすると、どんどん僕の愛する風景がなくなってしま……。結局、一度白紙に戻して、自分が未来に「あってほしい」ものを足していったんです。田舎、コーヒー、イチジクや金木犀、小動物の気配。だからこれは、僕が望む未来の風景画なんです。

恵谷：未来に何を残すのか、残っているのか想像するプロセスは、文化的景観学の見方で地域を調査することと似ているのかもしれない。住んでいる方々の想いが未来へとつながるのか、この風景がきちんと受け継がれていくのか、想像しながら現在を見ていく。

雨宮：そうかもしれないですね。願望の風景画を描くには現在を規定しなくてはならない。現在の重力を自分で勝手に規定し、クリエイティブするのは、もしかしたらアーティストの特権かもしれません。古いことを考えるのは未来のためだし、未来を設定するのは古いことを考えるためだと思います。1300石プロジェクトは重力や揺らぎ、新しさどう付き合うかなど、すべて包摂しています。一応新しい切り口を提示しているけれど、ぐるっとまわって僕はとても普遍的なことをしている。



「2002年に山道を歩いていたら、偶然綺麗な石が4つ並んであったので、持って帰りました。それが、「1300年持ち歩かれた、なんでもない石」プロジェクトの基礎となる個人的なスタート。その石はそれからずっと持っています。作品にしようと思っていたわけでもなく、持っていると秘密っぽくて良いんです。石を見ないようにするなど、自分ルールも設けていますね。(雨宮)

しているんだろう)ってみんな思わざるをえないから(笑)。研究もアートも、思考なんだけど技術じゃないですか。ただ、技術って一般的に言うて思考ではなく物質に宿りやすい。「文化的景観学」という言葉が必要になったのは、思考を景観という物質に宿す技術が必要になったからだと思います。未来の呪いとうまく付き合っていく技術は、もちろんアーティストも学者もみんな考えています。もっと技術が体系化されて伝承できるといいですね。

身体化してきた技術を 手渡していくために

恵谷：昔は地域のルール、規範としてさまざまな重力が伝えられてきたのですが、今は伝えられる人が少なくなり、途絶えてしまうこともしばしば。一方で、その重力を知らない新しい住民が入ったり、開発が起こったりしています。だからこそ、誰もが共有できる技術にしたいんです。

雨宮：恵谷さんたちが地域に足を運ぶことは、暮らしている当事者が見えていないことを周りから教える状態なんじゃないですか。当たり前だけど外から見た方が見えやすい。ただ、それと「伝えていくこと」は別のことでしょ。それは接続していった方がいいんですか？

恵谷：伝えるのと見出すのは確かに違うんですけど、いま私たちが見出しているのは伝え方も含めて見出している。例えば、都市部であっても高齢化で後継者がいないとなると、伝わっていかないんです。その場所ですべて暮らして地域を見てきた人は無意識に地域らしさや揺らぎの幅を伝えているから、受け継ぐ人がいないと途絶えてしまう。それをまずは言語化して、次の新しい人へ渡す必要があるんです。一昔前までは、私たち「見出し屋さん」の役割は必要なかったはずなのですが。

雨宮：昔は「見出しなくなり屋さん」がいなかったからですよ。しかも今、「見出しにくくなり屋さん」がすごく多い。見出し屋さんが同じ数いたって、端的にいうとインターネットがあれば、おじいさんや自然の言うことを聞かなくてもいいわけだから。もっと強くて新しい概念が出ないと、見出しにくくなる屋さんが勝ってしまう。スケーリングふくめ、地域をカウンセリングできる技術を持った人が必要なんですね。

恵谷：たしかに私たちの役割は町医者やホームドクターみたいなもので、ただ、継続してできるかと言われると難しい。

雨宮：実は、僕も技術との付き合い方や継承について興味があって。天皇の存在と技術について研究してみたいんですね。欧州の王族とは違って、日本という国の形態をかたどる祭司としての技術を2600年ほど担ってきた人たち。具体的に実践して、その精神と技術の付き合い方を保存している人たちは、彼らなんだろうと思っています。



「文化的景観学の考え方を整理し、文化財や地域づくりに取り組む方々に向けて『地域のみかた 文化的景観学のすすめ』を2016年に刊行。本研究では、地域の風土と人の営みの関係を探り、その相互作用が生み出す「地域らしさ」を、地域の言葉で語ることを、継承していくことを目指しています。この考え方を身につけて、暮らしの風景の魅力に気づき、地域の方々と未来を語るきっかけになればと思っています。(恵谷)

恵谷：なるほど。そのとらえ方はおもしろいですね。

雨宮：何かを引き継いだり拡散していったりすることは、人間がこれまでずっとやってきたことだったりしますよね。だから、本当に普遍的なことを、もう1回言い直しているだけかもしれない。

恵谷：引き継いでいくことって、過去に固着させているんじゃないかと時々思ってしまうんです。でも気持ち的には一生懸命「そうじゃないよ。でもちょっと気にしようね」と言いながら活動しているのが現状。植物はその環境に適応し遷移していきますが、地域も変化ではなく植物のように遷移していく。そうなる答えは1つではなく、どのスケールで、どの角度から見ると、未来の設定の仕方しだいなんです。どんなに悪い状況の地域であろうと、遷移の途中だと思えば、愛せるなって。

雨宮：自分自身も揺らぎの存在だと思うので、その都度変わっていくんですよ。自分も、他者も、社会も、未来も揺らぎの存在。僕は、その揺らぎ同士の解を自分なりの確かな技術を使い、その時々とりあえずの答えを出そうとしているんだろうなと思います。C



平城京遷都1300年をうたっていましたが、同じ年月をつないでいくことの途方もなさを想像します。

雨宮：1300石プロジェクトの肝になるのは、実はかかる時間の大きさ、積み重ねではなく、次に引き継ぐ人、過去に持ち歩いた人、同時期に違う場所で同じ経験をしている人、それぞれを想像し、今たしかに誰かが石を持ち歩いているんだという、「他者への想像力」なんです。

恵谷：1300石プロジェクトのWebサイトも拝見したのですが、書かれていた3314年の描写が特に魅力的でした。この風景はどこから、どのように生まれてきたのでしょうか？

□「1300年持ち歩かれた、なんでもない石プロジェクト」

雨宮氏が2013年に、「国東半島アートプロジェクト」へ参加したことをきっかけにはじまったプロジェクト。小さな石6個を「イチモチ」と呼ばれる6人が1つずつ持ち、5年ごとに引き継ぎながら1300年間にわたって持ち運び、あえて、落とせば見分けもつかなくなるなんでもない石を選んだことで、次に引き継ぐ人や過去に持ち歩いた人、現時点で石を持っている人への水平方向にはたらく「他者への想像力」に焦点をあてた。また、石の劣化を防ぎ、かつイチモチ自身の想像力を助長させるため、石は金属製のカバーに入れられ、その日が来るまで開けようと思えば開けられて、開けないようにすれば問題なく存続できる「技術」を、1300年前である奈良時代の研究者などに指南を受けて制作した。雨宮氏は「セワヤク」という名前で、作品が完成する3314年まで代々、石とイチモチを見守る役目を担っている。

<http://ishimochi.com/>

雨宮：3314年10月15日11時に石を持ち歩く人=イチモチたちが国東半島へ再度集まったときの風景ですね。文章で描写をする際、どうしても登場するものをすべて注意深く考えないといけないかった。地域の図書館で郷土資料をリサーチしたり、半島の中をぐるぐるとくまなくめぐり、テキストの精度を上げる養分として必要でした。それこそ、地域に宿る重力を解析し、長く見通す作業。

「これはいつから存在し、いつまで存在するか」を考えると、1300年後にまで残っている保証はないわけです。間違いなく1300年後にもあると思われる「地

恵谷：歴史を研究することもまた、過去を振り返りながら未来につなぎ、未来を考えることなんですよ。私が所属する奈良文化財研究所は歴史の研究が中心なので、もっとそれを意識することで研究の意義が深まるように思います。

雨宮：僕は、人間には未来を考える自由ではなく、責任があると考えています。「いまから現在の話をしますよ」と言ったときの「い」から「よ」までだと「よ」が未来ですよ。だから僕らは時間という概念が発明されて以降、常に未来に生きている。そのくせ未来はわからないという呪いがかけてられていて、そこには常にチャレンジしなきゃいけない責務があると思うんです。責務を果たしてこそマンネリ=普遍性に到達できる。

恵谷：生態学の研究者の方々と、研究や計画は「半熟」のほうがいいという話をしていたんです。未来に更新可能な部分を残したいという興味でしたが、多分その先にマンネリがあるように思いました。アーティストの方からマンネリという言葉は違和感ありますね(笑)。

雨宮：普遍性を獲得しようとする、ちょっとアバンギャルドな風体になるだけで、本当に新しいことを目指したら普遍的なものになると思います。学問も含め全部基本的にはそのバランスが違うだけで、等しく同じ未来を考える呪いの中にいるのだから、良い呪いですけどね。

恵谷：なかなかそこに、気づいている人って少ないですよ。雨宮：40歳までアーティストやっている人なら気づいています。「俺何

□奈良文化財研究所

1952年、奈良に残る古建築や古美術品を総合的に研究する目的で設置された国立の研究機関。1960年代からは平城地区と飛鳥・藤原地区で宮跡等の発掘調査と研究を進めているほか、国内外の貴重な遺跡や遺物を守り、活用していくために、文化財の保存・修復・整備に関する研究にも力を入れている。2006年度からは、新たな文化財類型である文化的景観も調査・研究領域として取り扱っている。

<https://www.nabunken.go.jp/>

Review by Spectator

立会人：野口卓海(美術批評家/詩人)

「お前らはなあんにも見とらん。自然は全部繋がって、全部教えてくれるつちゅうのに。」年配の猟師に誘っていただいて、鮎の網漁をお手伝いしたことがある。魚の居場所・川底の地形・流れの強弱、そういった要素を瞬時にかつ総合的に判断しながら、その猟師は都度適切な角度に網を張っていく。私がその技術の高さに度々驚いていると、猟師のおっちゃんはほつりとそう漏らした。そのほかにも幾度か猟師の方々と話す機会があった。一緒に鳥の毛をむしりながら、こういった技術や方法の行く末を考えていた。情報化しやすい技術である動物のさばき方や巣のつくり方は、恐らく今後も残るだろう。しかし

実は最も重要な、ただ「見る」という技術や方法は果たして残るだろうか。情報化しづらい物事は、伝えようと意識しない限り消えていくばかりだ。断絶はすぐそこまで来ている。自然だけでなく地域や文化や歴史を考えると、最早私たちはひとつの視点ではなく、複数の動く目によってそれらを眺めなければならぬだろう。当てるべき焦点や画角も、対象や状況によってぐるぐると変えられるような想像力を伴った軽やかな視座こそが必要だ。そうでなければ、世界はすぐに単純な二項対立へと陥ってしまう。対談の中で垣間見たおふたりの未来と歴史の見つめ方も、まさにその想像力の表れである。そして、その想像力こそが透明な断絶を暴きだし、同時にそれらを癒す力でもあるのだ。

オープン北加賀屋

地域の出来事をひらく、伝える

旧千鳥文化住宅再生絵日誌

家成俊勝 (旧千鳥文化住宅PJ設計担当)

2004年、赤代武志と建築事務所dot architectsを共同設立。北加賀屋を拠点に、さまざまな企画に関わる。

旧千鳥文化住宅の改装ですが、まずは構造の補強の方針が決まりました。1階は既存の建物の中に、もう1つ建物をつくり、その新旧の構造をつなげることで構造的に強くするというものです。2階は、できるだけ既存の構造や壁を残していきたいと考えています。新旧がどう混ざるか、そのバランスが肝になります。それに伴って中身も大体決まりました。1階には、まず地域の人たちがフタリと入れるオープンスペース。ここには図書や薪ストーブが置ければいいと思っています。僕たちの仕事で出た廃材を冬はガンガン燃やせそうですし。もう1つはカレー屋さんか定食屋さん。カレー屋さんになる場合、ドットアーキテクツメンバーの土井くんがスタジオムンバイで働いていたときの同僚からスパイスを送ってくれそうです。それからパーコーナー。時々、コーポ北加賀屋でホームパーティーのように開店していたバー「タチアナ」を復活させようかと思



案しています。最後に古材バンクです。北加賀屋周辺で取り壊される物件から出てくる使える廃材を集め、ここで販売して北加賀屋で何かつくりたい人やアトリエや住居を改装したい人のために使ってもらえたらと思っています。2階ですが、MASKに置かれている巨大彫刻作品とは対照的に小部屋に分散させて、小さなアート作品をたくさん収蔵できればと考えています。MICRO ART STORAGE?

Illustration: Ryo Mochizuki

北加賀屋みんなのうえん×淀川テクニック

街なか糞土師への道 ~中級編~

何ごとにも段階が必要。恋も野糞も人生もね! —そんな教訓をリビングソイル研究所の西山雄太さんから学びました(誇張表現あり)。土の再生の専門家である西山さんに、有機物から土を生み出す方法を教えてもらいました。土は数え切れない生き物の営みと循環が生み出す、奇跡のような存在。でも、つくる方法は至ってシンプル。ズバリ「積み重ねるだけ!」。草や野菜を密度濃く積み重ねることがポイントだとのこと。はじめから生ゴミやウンコに手を出すと、匂いや虫のせいで心の距離が開いてしまいます。糞土師への道のりはまだまだ険しい!



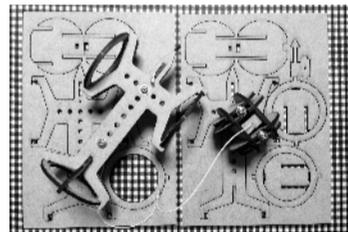
▲有機物が土に帰る仕組みに触れる。

金田康孝 (NPO法人コトハナ) まちづくりや農業のプロジェクト、アート・暮らしにまつわるイベントを多数企画。北加賀屋みんなのうえん管理人。築50年の長屋でリノベーション暮らしを奨励中。

北加賀屋のエジソンたち

case 03:

アニワギはかせ / ビルドケット



OPEN DATA
http://fable.cc/a2wagi/buildoquet

100年近く形が変わっていない伝統玩具、けん玉。けん玉の技はたくさんあるのに、ほとんど知られていません。なぜか。難しすぎてできないから。そこで、技が簡単に決まる新しいけん玉を目指して生まれたのがビルドケットです。大きな皿、鋭い剣、すべりにくい玉。でも一番の特徴は「あなた好みのけん玉」に改造しやすいこと。平面の設計図とレーザーカッターから1つずつつくれるビルドケットで、あなたも伝統の形に挑んでみませんか。

アニワギはかせ
(最先端科学お勉強型ポッドキャスト 青春あるでひと)

隠れ眼鏡店の、出張お悩み相談室!

お答えするのは……

内原弘文 Hirofumi Uchihara

眼鏡士、眼鏡作家。2011年より北加賀屋に「隠れ屋1632 秘密基地」を設立。完全オーダーメイドのめがねをつくる。

お悩み

覆面がないと落ち着かない!

レスラーをしているのですが、職業病か覆面をしていないと落ち着きません。でも先日目出し帽をかぶっていたら、職務質問されてしまい……。なんとかなりませんか?

こたえ



そんなときは……

休日用覆面めがね!

キュート路線の覆面はいかがでしょうか? ネコのようなつり目と、さりげなくあしらったハートマークがポイント。プライベートも堂々と覆面ライフを楽しめますね!

TOPICS from CFCO

おおさか千鳥財団(CFCO)は、大阪で行われる芸術、文化活動の支援を通じて、地域の新たな価値を創造し、創造的かつ文化的に多様な地域社会の創出を目的として設立されました。

REPORT

1 「Open Storage 2016」開催報告

2016年9月に、大型美術作品の収蔵庫MASKを一般公開。メインアーティスト・やなぎみわが、MASK 収蔵作品であるステージトレーラーを使用した野外演劇公演『日輪の翼』を名村造船所大阪工場跡地にて上演し、MASKでは新作写真作品「黄泉平坂」を発表。『日輪の翼』公演は横浜、新宮、高松を巡るツアーの大阪凱旋公演として行われましたが、ツアー前には、MASKにて約1ヶ月の滞在稽古が行われました。収蔵作品が演劇という表現形態へと展開し、MASKで新たなクリエイションが実現したことにより、「創造する収蔵庫」としての可能性を強く印象づけました。

展示期間: 2016年9月2日(金)~19日(月・祝) 参加作家: やなぎみわ、宇治野宗輝、久保田弘成、金氏薫平、名和晃平、ヤノベケンジ 会場: MASK (MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA)、名村造船所大阪工場跡地 主催: おおさか創造千鳥財団



名村造船所大阪工場跡地にて開催した『日輪の翼』大阪公演

photo: Ai Nakagawa

2 MASKにて映画『BOLT』関連撮影



MASKにて撮影された映画『BOLT』パイロット映像

ヤノベケンジ氏が美術を担当するSF短編映画『BOLT』(監督: 林海象、主演: 永瀬正敏)のパイロット撮影がMASKと近隣の名村造船所大阪工場跡地にて行われました。大地震によって原子力発電所から漏れ出した高放射能冷却水を止めるために、発電所内のボルトを締めに行く作業員の奮闘を描いた本作。MASK収蔵作品である《ウルトラ-黒い太陽》、《風神の塔》ほか、代表作《アトムスーツ》などヤノベ氏の作品群が映画美術の一部として使われています。撮影が始まると、美術作品が映画セットと化して今までは違う表情を帯び、新たな空間が立ち上がったことが印象的でした。この映画の本編撮影は2016年7~9月に高松市美術館で開催されたヤノベ氏展「CINEMATIZE シネマタイズ」会場にて行われ、2017年に一般公開予定です。

Web: <http://www.yanobe.com/index.html>

photo: Nobutada Omote

NEWS

2017年度公募助成募集中!



2015年度創造活動助成
「REAL time FOOD - A Community + Nature Art Project-」

大阪の創造環境向上を目的として、以下の2つのカテゴリで公募助成の募集を行っています。申請締切: 2017年1月11日(水)当日消印有効

- 1) 創造活動助成: 大阪府下で行われる活動または大阪府内に拠点を持つアーティスト等の活動に対し助成金を交付。ジャンルや活動の形態は問いません。新たなことに挑戦したい人や次のステップに飛躍したい人、社会に新たな視点や価値観を提示し、「創造活動」の定義をも問い直すような意欲的な活動を重点的にサポートします。
- 2) スペース助成: 造船所跡地を活用した創造スペース「クリエイティブセンター大阪」を創造活動の舞台として無償で提供し、助成金も交付。産業遺産という特殊なポテンシャルを持つ当施設の新たな魅力を引き出すような活動を募集します。

詳細は財団Webサイトでご確認ください。申請書もダウンロードできます。

ACTIVITY

1

2016年度創造活動助成
goat 欧州ツアー
<https://sites.google.com/site/bandgoat/top/schedule>



2016年8月、フランスに拠点を置く Zoobook Agencyの協力の下、10日間に渡るEUツアーを行った。SwedenのGoteborgで開催された「Clandestino festival」を皮切りに、5ヶ国7公演、ラストはPolandのKatowiceで開催された「OFF festival」に出演。12月に新プロジェクト発表予定。

文: 安藤映彦 (goat)

2

2015~16年度スペース助成
クロニクル、クロニクル!
<http://www.chronicle-chronicle.jp/>



丸1年を会期とする現代美術の企画展「クロニクル、クロニクル!」。名村造船所全体を会場とし、1年間の会期のはじまりと終わりの2回、展覧会を繰り返す。「繰り返すこと」をテーマに、リュミエール兄弟からマネキンの造形作家、戦後美術の大家、新進気鋭の作家ら20名が参加。2回目は2017年1月23日~2月19日。

文: 長谷川新(クロニクル、クロニクル! 実行委員会 キュレーター)

社会をもっともっと分厚くするために

私の会社は毎日数百万人が利用するニュースアプリを開発・提供していますが、私自身はそこで社会貢献プログラム「NTAS」の運営に取り組んでいます。非営利団体にアプリ上の広告枠を無償提供することを通じ、様々な社会課題の認知拡大を狙うプログラムです。現在は第2フェーズで「子ども」を取り巻くさまざまな問題に焦点を当てています。なぜ今、非営利団体を支援するのか。自分なりの理由があります。

今の社会を一言で表すと、何らかの問題を抱えている人が増え続ける一方、それを解決する力がどんどん弱まっているという状況。俯瞰すると、



望月優大
Hiroki Mochizuki

スマートニュース株式会社
1985年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了。経済産業省、Googleなどを経てスマートニュースへ。自社プロダクトのグロースに携わる傍ら、様々な形でNPO支援など、社会に貢献する方法を模索中。ATLAS2では「子どもが平等に夢見れる社会を残そう」をコンセプトに掲げている。

> 望月さんが選ぶ次のコラムニストは…
石崎麗人氏（株式会社Backpackers'Japan）
ビールが美味しく居心地が良く何度でも行きたくなる、そんな素晴らしいゲストハウスをつくっています。（望月）

つないで見える、
人とまちの多彩なあり方

誰からも頼まれてないのに

別府は源泉数、湧出量ともに全国1位の温泉観光地である。日本の近代化と歩みをともし、大きく発展を遂げたこのまちは、時代の変遷の中、鮮度が失われ次第に老朽化し昭和50年代をピークに観光客も減っていった。

その状況下、市民有志が「別府八湯独立宣言」なるイベントを平成8年に勝手に催し、そこから別府のまちづくりがはじまる。今年には20周年にあたる記念の年である。

私は、平成16年頃、当時住んでいたパリでその活動を知った。隣の大分市に生まれ、子どもの頃から盆や正月に親戚とともに別府に泊まること

問題を抱えた個人が頼れるのは「市場」か「国家」か「社会」の3つですが、「市場」が提供するサービスはお金がないと利用できません。「国家」についても恒常的な財政赤字が問題視される状況です。すると、「社会」がどの程度の厚みを持つているかがこれまで以上に大切になりますが、現状はむしろ社会の厚みがどんどんと失われている状況です。「社会」を構成する「家族」や「地域」あるいは「会社」、そうした人間同士のつながりが少しずつ弱まることで、「頼れる人が誰もいない」状態に陥ってしまうリスクが日に日に高まっています。

NPOなどの非営利団体には、こうしたリスクに直面してしまつた人々を救う最後の砦となる可能性ががあります。しかし、彼ら自身もお金がなければ事業を持続的に運営していくことができませぬ。非営利団体の活動自体がまた別の誰かによるサポートを必要としているのです。非営利団体は私たちの代わりに人々をサポートし、私たちは非営利団体の活動を後からサポートする。そうした関係性をいくつも社会の中につくっていくことが、社会の厚みを増し、人々が一度落ちてしまつた穴から這い上がる可能性を高めることにつながります。いつか私たちが支えを必要とするときがきます。そのとき私たちが頼ることのできる「社会」がそこにあるかないか。決めするのは今の私たちなのです。

が何よりも楽しみだつた。人が溢れ、みな浴衣一枚で歩き、性と俗が混在するあのまちは、今考えると異世界そのものだつたように思う。その記事を読み、別府は今どうなっているのだろう、仲間のアーティストたちに別府を見てもらいたい、彼らはどんな刺激を受けどんな作品を生み出そうとするだろうか、それが見られるにはどうしたらいいか、ああ芸術祭を開催すればいいか……。そう考えはじめると、いてもたってもいられなくなり帰国することにしました。そして、「BEPPOC ROOM」は平成17年に生まれる。つまり、「BEPPOC ROOM」はその風景が見たいと願う、観客である。行政が、美術館が、誰かが実現してくれないことに不平を述べる暇があれば自分で一歩ずつ行動すればいい。そのモチベーションは、町の活性化のためにとか、誰かのためにとかそんな他者に對する思いからは始まらない。

活動から10年が過ぎ、気がつけば実現したプロジェクトは1000を超える。あのとき夢見た芸術祭「混浴温泉世界」は昨年夏で幕を閉じた。代わりに、「グルーブ展」から個展へ、「キヤッチコピー」は、今年から新たなプロジェクト「COMPOC」がはじまっています。

すべての物事は関係性の中にある。場所を変え、時を変え、形も変われど引き継がれるものは意志だ。我々の活動が100年後の子どもたちに受け継がれたならばと改めて考えた。



山出淳也
Jun'ya Yamaide

NPO法人 BEPPU PROJECT 代表理事/アーティスト
1970年大分生まれ。文化庁在外研修員としてパリに滞在し、帰国後は地域や団体との連携による国際展開を旨として、2005年にBEPPU PROJECTを立ち上げ現在にいたる。別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」総合プロデューサー（2009、2012）、国東半島芸術祭総合ディレクター（2014）、おおいとイレンナーレ2015総合ディレクター（2015）。

> 山出さんが選ぶ次のコラムニストは…
上田假奈代氏（詩人/NPO法人「こえとことばとこころの部屋」代表）
場所やアプローチは違えど、同志と思える数少ない人。（山出）